

令和 4 年 № 81
秋ひがん号

あきばさん

発行人 / 発行所
秋葉山 新井 寺
272-0144
千葉県市川市新井
1 丁目 9 の 1
電話 047-357-8319
FAX 047-357-8399
mail: info@shinseiji.jp
http://www.shinseiji.jp
郵便振替 00150-2-282968

秋彼岸会

暑さ寒さも彼岸までの好時節

当山住持

本年も秋彼岸の好時節が訪れました。春秋の両彼岸はお盆とあわせてご先祖様の追善報恩供養に、自分自身の心の修養・勉強に伝統的に親しまれ継承されてきました。私たち日本人の国民生活の中にも浸透し、両彼岸の「中日」は国民の祝日になっています。

これは「彼岸」は、日本仏教の根本的な教えである先祖供養を中心に、生かされていく自分たちもお悟りの世界・平和な世界へ到る心の修養期間であるといふことが、大切な教え・柱として日常生活の中に活かされているゆえんであると存じます。

「彼岸」の意義は、お彼岸のたびに布教教化申し上げますが、インドの言葉「波羅蜜多」パーラミター」が「到彼岸」と訳され、悩みや苦しみ多きこちらの岸（此岸）からお悟りの理想の岸（彼岸）に到るといふことです。

春分の日・秋分の日を「中日」とし、この日は昼と夜が等しく同じ長さになるととされています。ここには、お釈迦様の教えの一つである「中道」に通じる思想が感じられます。すなわち、一方にかたよらない。こだわらない。両極端に執着しないということです。

ところが、今の世の中は何かにつけて思うにままならないお釈迦様が説かれる「四苦八苦」の苦の娑婆の一例ではないでしょうか。その現況として、世界的に大流行し人びとを不安と苦悩へと追い込んだコロナ禍の問題があります。未だに終息せず、その影響は深刻で、大切な命や健康にも不安を抱え、経済的にも厳しく、物心共にコロナ禍以前の日常生活にはほど遠い状態です。人間の世界の中心はいうまでもなく「心」ですから、この環境下にあつてお互いにストレスが重なり、大切な心が反応して大変苦しい現実に向直していることでしょう。仏教の教理は二千五百年以上の時を超えて今もなお、私たちの日常生活の中に活かされ支えとなつています。また、お釈迦様は人びとの病にに応じて薬（教え）を与える「応病与薬」の心の名医とも伝えられています。どうぞ、秋彼岸にちなみ、仏教の平和へのお導きである六波羅蜜（布施・施し・持戒・規律を守る・忍辱）がまん・精進・努力・禅定―心の安定・智慧―正しい判断）を少しでも勉強実践し、此岸から彼岸へと到ることが出来ますように。

合掌



わたしたちの曹洞宗 そうとうしゅう

「お経」について

第六回は、「お経」について学んでみましょう。今回は、日ごろ、ご法事などのご先祖様のご供養にお読みしているおみなお経をご紹介します。

◆ 八万四千の法門 はちまんしせん ほうもん

「八万四千の法門」という言葉があります。「八万四千」はとても多いということ。「法門」は仏法・仏教の入口。その入口に人びとを導くための教えです。お経は、お釈迦様や祖師方が説かれた教えですから、「八万四千のお経」といいかえることができます。

お釈迦様はお医者様が病氣の人に薬を与えるように、一人ひとりにふさわしい教えを説かれました（おうびょう ややく 応病与薬）。ですから、**教えを求め人の数だけの教えがある**のです。それが「八万四千の法門」ということです。



◆ 摩訶般若波羅蜜多心經 まかはん にや はらみつたしんぎょう

『摩訶般若波羅蜜多心經（般若心經）』は、おそらく日本でもっとも多くの人に知られ、親しまれているお経でしょう。

わずか二六二文字に「空」の教えが説かれていきます。「空」とは、あらゆるものごと・存在は実体はないということ。つねに変化し続けていて不変のものはないということ。その真実を学び、執着から離れることがゆるぎない安心の生き方だと導いています。

◆ 観音經 かんのんぎょう

正式には『妙法蓮華經觀世音菩薩普門品（偈）』といます。『妙法蓮華經』とは、『法華經』のこと。『法華經』は全部

で二十八の章があり、それぞれの章を「品」と呼びます。ですから、『妙法蓮華經（法華經）』の中の「觀世音菩薩普門」という品（章）がこのお経にあたります。また、このお経の偈文が「世尊妙相具」とはじまるので、その頭の二字から「世尊偈」ともいわれます。「偈文」とは、本文につづく、本文のエッセンスを漢詩にしたものです。

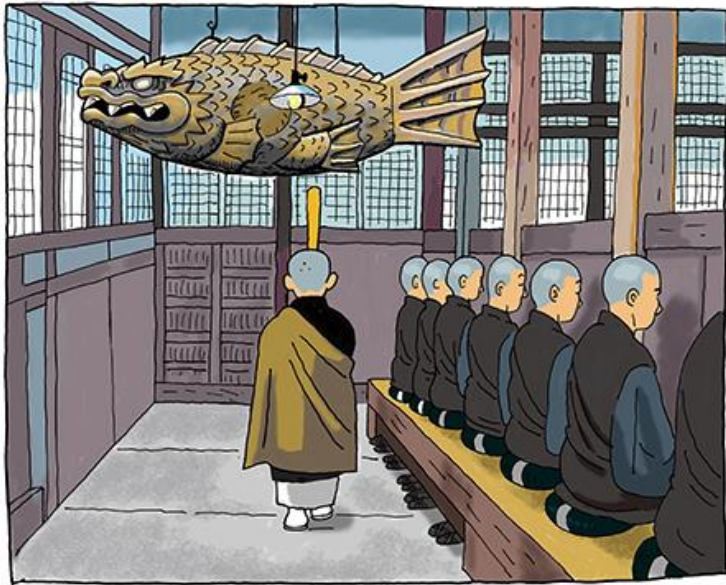
このお経には、「念彼觀音力」というフレーズがたびたび登場します。觀音様のお力を心に深く念ずれば、きつと觀音様が困難から救ってお導きくださると、一般的には解釈されます。

觀音様は、「觀世音菩薩」の名のごとく、世界中を觀じその音や人びとの心の声に耳を傾け、大慈悲心をもってわたしたちを悩みや苦しみ迷いから救ってください菩薩様です。その功德が説かれたお経といえましょう。

◆ 『修証義』 全五章

『修証義』は、道元禪師様が著わされた『正法眼藏』から一般の皆様にもわかりやすいお言葉を抜粋して編集された曹洞宗オリジナルの和文のお経です。『般若心經』や『觀音經』は木魚をつきますが、『修証義』は木魚を使いません。一八九〇（明治二三）年に公布されました。

『修証義』の修は修行、証はおさとの意味です。道元禪師様は修行とおさとりは一つと説かれます。修行の結果としておさとりを得るのではなく、修行している姿そのままがおさとの姿ということ。修行するところに、おさとりはすでに現れているということです。ですから、教理や理論を学ぶだけでなく、実践が



重んじられます。『修証義』は、お釈迦様の正伝の仏法を正しく学び、その教えにもとづいた日常底の実践について説かれているお経なのです。

● 第一章 「総序」そうじよ

『修証義』全体の総論、序文的な位置付け。仏教の基本的な教理（今生かされてきていることの尊さに気づき、今こそをどう生きるかを明らかにすること）が示されています。

● 第二章 「懺悔滅罪」さんげめつざい

懺悔は「さんげ」ではなく、「さんげ」と読みます。

わたしたちは、大なり小なり、気づかないうちに罪や過ちをつくってしまっていることがあります。罪というと、重たく感じますが、日常生活の中で、自己中心的な行ない・言葉・おもいが、誰かを傷つけ、自分自身をも苦しめてしまうということがあるものです。日常をふり返ったとき、悔い改めねばと気づくことは、誰しもあるのではないのでしょうか。そういう自分に気づき、過去の過ちを心から反省してその過ちをくり返すまいと誓うことが「懺悔」といえますよう。

ほとけ様には隠しごとと、ごまかしもできません。ほとけ様に心からの懺悔をしたならば、ほとけ様は見守り導いてくださると説かれています。

● 第三章 「受戒入位」じゆかいにゆうい

「戒」かいについて説かれています。戒とは、お釈迦様が示された心豊かに正しく生きる道しるべとなる教えです。この戒にしたがって生きることが、ほとけ様の道を生きるということであり、ゆるぎないやすらぎの道なのです。

● 第四章 「発願利生」ほつがんにりしやう

自分よりも他の人びとのしあわせを願う生き方—菩薩行—について。その具体

的な実践として「四摂法」(布施—見返りを求めない物心の施し・愛語—いづくしみと思いやりの言葉・利行—他の人びとのために・同事—自分のこととして考え相手と一つになる)の教えが示されています。

● 第五章 「行持報恩」ぎやうぢほうおん

わたしたちは、さまざまな人びとやご縁に支えられて、今ここに生かされています。そうしたあらゆるご縁への感謝の気持ちを忘れず、そのご恩に報いる生き方をするのが説かれています。今こそをなおざりにせず、ていねいに全力で生きていくこと、それが報恩の生き方なのです。

お経の本をご希望の方は、おてらでもおわけすることができまますので、ご相談くださいませ。

テレホン法話
 11月1~7日
 「一万メートルの空のむこう」
 副住職の法話です
 フリーダイヤル
 0120-508-740
 携帯電話からは
 03-3454-5410

◆ お経の読み方

曹洞宗のお経には、特別な読み方や難しい節はありません。ただし、大勢での読経では、一人だけ大きな声を出したり、遅速があつてはなりません。お互いの声を聞きながら、声の大きさやお経のスピードを合わせていく。それが「お経を耳で読む」ということです。御本山でのおつとめは、百名以上の雲水さんがお経を読んでいても一つに聞こえます。莊嚴にも感じるその重厚な響きは、まさに「仏音声」^{ぶつおんじょう} ほとけ様の「ハーモニー」に感じられます。

読経供養は、ほとけ様におもいを寄せて、声に出すことがたいせつです。そして、一言一句の意味を考えながらではなく、お経を読むという事に専心することです。はじめは、誰でも間違えたり、つかえたりしてしまうものです。くり返し読んでいるうちに、難しい言葉にも慣れ、スムーズに読めるようになります。毎朝お仏壇におまいりするとき、どうしても心が落ち着かないとき、一つでも一行でも声を出してみてはいかがでしょうか。心のやすらぎとほとけ様との感応道交がきっとあるはずです。

(副住職しるす)

これからのしんせいじの行持

どなたでも参加いただけます

十一月十八日 秋葉火坊大祭

十二月八日 釈尊成道会

十二月三十一日 年越し坐禅会

一月一日 元旦祝祷諷経

※ コロナ禍により、変更や中止となる
ことがあります。

● 月例坐禅会 毎月第四日曜日
午後三時から

● 月例写経会 毎月第四土曜日
午前十時から

● 梅花講 (御詠歌) 月二回
午前九時半から

※ 坐禅会・写経会・梅花講は、現在
お休みさせていただいています。

おねがい

お墓参りのお線香について

境内墓地へのお参りの際、持参されたお線香もお寺で火をおつけしますので、お気軽にお位牌堂の前の玄関にお声をおかけください。
火の用心にご協力をおねがいます。

編集後記



今回の「わたしたちの曹洞宗」は、お経について書いてみました。

お経は、亡き人のために、ほとけ様のために読むと思いがちですが、じつはそうではありません。お経は、お釈迦様や祖師方の教えです。そこに説かれているのは、たった一度のいのちの今を最高に生きる生き方なのです。

ご先祖様やそれぞれにおもいを寄せる亡き人と向き合うとき、不思議と謙虚になれるものです。真摯に謙虚に自分自身をふりかえったとき、気づきや反省があります。

亡き人をご縁として、ほとけ様の教えに出会う。その教えは、わたしたちの心の闇を照らすともしびになります。そして、より豊かに生きる道しるべになります。亡き人のご供養のためにと読んだお経は、じつはわたしたち自身の生きる力につながっているのです。

わたしたちが心豊かに、仲よく、しあわせに生きていくことが、ご先祖様やほとけ様を心配させない、何よりもよることとくださることなのです。それが、最高のご供養といえます。

どうぞ、ご自愛くださいませ。

編集小子 合掌